

令和4年度 自己点検・自己評価委員会活動報告

自己点検・自己評価委員会は、学校の組織及び運営に関すること、教育活動に関することを自己点検・自己評価し、学校の将来構想及び教育活動の改善と向上を図ることを目的として、令和4年度は10回開催した。

1 委員会構成員

委員長	校 長	上牧 務
委員	副 校 長	佐野 繁子
委員	事 務 長	岡 哲丈
委員	看護学科教務長	和田 愛
委員	助産学科教務長	池村 さおり
委員	教務主幹	坂本 希世子
委員	看護教師	山本 智美

2 会議実績

回数	日程	主な内容
第1回	令和4年 4月19日(火) 15:00~15:40	今年度の委員会活動について 今年度の活動目標と自己点検・自己評価の実施方法 会議日程の決定
第2回	5月23日(月) 11:10~11:40	今年度の活動目標 自己点検・自己評価表の修正
第3回	8月29日(月) 15:00~16:00	自己点検・自己評価の中間評価のまとめ①
第4回	9月2日(金) 11:00~12:00	自己点検・自己評価の中間評価のまとめ②
第5回	9月15日(木) 14:10~14:40	自己点検・自己評価の中間評価のまとめ③
第6回	10月21日(金) 14:30~16:00	学校関係者評価会議の結果を受けて
第7回	令和5年 2月7日(火) 13:00~14:00	自己点検・自己評価の最終評価のまとめ①
第8回	2月10日(金) 9:00~10:00	自己点検・自己評価の最終評価のまとめ②
第9回	2月13日(月) 11:00~12:00	自己点検・自己評価の最終評価のまとめ③
第10回	3月14日(火) 10:00~11:00	第2回学校関係者評価会議の結果を受けて 次年度の課題

3 今年度の取り組み

目標として次の3つ、1) 目的を共有し、令和4年度入学生から始まった新教育課程と看護学科2・3年生の現行教育課程を並行した運営状況を確認する、2) 学生の主体性を育む支援を強化しその取り組みを確認する、3) 本校の看護学科・助産学科の特徴や看護の魅力

を地域に発信しその取り組みを確認する、をあげた。12の分野別に「強化チーム」を作り、強化チームのメンバーは他の職員の意見を聞きながら、リーダーシップを発揮して学校運営にあたった。強化チームが評価を行い、その取り組み状況、課題となることを職員会議で報告し、状況を把握した上で自己点検・自己評価を行った。学校関係者評価会議において令和4年度の間評評価と最終評評価の報告を行い、取り組みについて意見と示唆を得た。

4 令和4年度の自己点検自己評価の結果

	点検項目	評価点	
		看護学科	助産学科
1	教育理念・目標	4 (4)	4 (4)
2	学校運営	4 (4)	
3	教育活動	4 (4)	4 (4)
4	卒業・就業・進学	4 (4)	4 (4)
5	学生支援	4 (4)	4 (4)
6	教育環境	3 (3)	
7	学生募集	4 (4)	4 (4)
8	財務	4 (4)	
9	法令の遵守	4 (4)	4 (4)
10	社会貢献・地域貢献	4 (3)	
11	国際交流	4 (4)	
12	教育力の向上	4 (4)	

※ () 内は中間評価点

5 自己点検・自己評価結果と今後の改善策

点検項目	評価点	点検結果・今後の改善策など
(1) 教育理念	4	<p>【看護学科】</p> <p>ガイダンス、講師会議、保護者会、保護者アンケート、実習施設との連携において教育理念、ディプロマポリシーについてコロナ禍においても遠隔手段も用い周知理解を図る機会を設けた。保護者より、リモートで参加し担当と話ができよかったという意見があった。約50%の参加率で低学年ほど参加人数が多く、入学後の学校への関心度の高さが伺えた。保護者へ実施したアンケート結果では、84%が教育理念を「理解している」・「だいたい理解している」であった。講師会議では外部講師より、目標と科目との関連が具体的に説明を聞いて理解したと反応があった。</p> <p>「自ら学ぶ姿勢」となるよう、学習会を8回開催し、学生の履修状況を共有しながら、目標とする育てたい学生像に近づくよう、授業方法を教員間で意見交換した。事前の資料配布、課題を設けるなどの工夫をし、受け身とならないような授業を模索した。</p> <p>【助産学科】</p> <p>講義要綱の各科目にディプロマポリシーを掲載し、講義とディプロマポリシーの関連性を講義開始時に外部講師と学生に伝え周知を図った。学生には授業評価に「ディプロマポリシーが意識できる内容であった」という項目を入れて確認し</p>

		<p>た結果、授業評価の結果の平均は3.5で、評価4の「非常にあてはまる」と評価3の「だいたいあてはまる」であった。講師には、講師会議のアンケートで「教育目標について知っているか」に対し、「知っている」が87%（前年度47%）であった。次年度は、引き続き周知を図り教育に活かされるようにしていく。</p>
(2) 学校運営	4	<p>新体制で新たな役割を担う中、コロナ禍での新教育課程の実践、台風による断水、後期に看護学科の教員2名の不在などに対応しながらの学校運営であった。</p> <p>新型コロナウイルス感染拡大の影響に伴う実習受け入れ条件について実習施設と調整を重ねた。学内実習では、看護学科の学生がリアルに分娩の進行や産婦の思いや痛みを感じられるように、助産学科の学生が実習経験を活かして産婦と助産師を演じた。また、助産学科の学生が準備した母親学級を看護学科の学生に実践する、3月には助産学科の研究発表に51名が参加し、看護学科と助産学科があるよさを活かす取り組みを教員間の連携で行った。また、実習施設とは、目標達成に向けて両学科とも実習期間の延長、臨床判断力をつけるためにシミュレーションモデルを借りて病院で演習を行うなど協力を仰いだ。実習で、対象者の権利を尊重するための判断と行動が伴わない学生の姿があった。教育の結果であると受け止め、学生の判断過程に注目した支援を意識して行っている。看護を行う者として倫理的判断が選択できるよう、教員間での学習を行っていく予定である。また、コロナ禍で学生人数に合わせた実習環境や分べん介助の機会確保に向けて両学科とも1つの実習施設を開拓し、12月には県の認可を得て、実習施設との具体的な調整をすすめている。</p> <p>学生に質のよい教育を行う基盤づくりに教育体制の整備は不可欠である。新教育課程がはじまり、教員間での検討や学習について計画的に実施し、授業研究にも取り組んでいる。必ずしも最も優位の学会に参加できるばかりではないが、公費で各教員1回は参加している。コロナ禍でオンラインの参加が可能となったよさと視聴期間内に勤務時間での視聴に苦慮する状況もあった。次年度は看護学科では1名の新たな教員を迎え、助産学科では恒久的に定員4名の教員体制を確保した。専任教員養成講習会に2名参加し、講習会に携わることは自己研鑽にもつながる。講習会参加の期間を補う看護師・助産師を確保し協力を得て、ワークライフバランスを保ち、建設的に対応していく組織をみんなでつくっていききたい。</p>
(3) 教育活動	4	<p>【看護学科】</p> <p>新カリキュラムの授業について専門分野のチーフを中心に構成し、実践の場で活躍する看護師に依頼し新たな授業計画を立案した。学生便覧・講義要綱・実習要綱・実習指導要綱などカリキュラムの編成に伴い編集を行い学校生活において用いながらカリキュラム運営に活かした。</p> <p>授業評価は電子アンケートで実施し、結果を授業担当者のコメントを入れ、図書室で開示する一連の流れをシステム化した。学生が自由に意見を述べる機会を設定している。</p> <p>コロナの状況で補習実習や学内実習に切り替わる状況が、研修時間の確保に苦慮した。精神看護では臨床研修として、精神看護学実習前の事前研修に3名、学生の長期休みを活かして2週間程度1名実施した。</p> <p>ほとんどの学生が進級できていた時代と状況が異なり、複数の科目で単位取得に至らない学生に対する進級の基準について設けるか検討を要する段階にある。</p>

		<p>多職連携教育において、本校の学生の接遇が不適切であることが浮き彫りとなった。教員としての指導上の認識をすり合わせ、他学年と交流などを通し、相手を気遣う姿勢をどのように育てるか課題としてとりあげていきたい。</p> <p>【助産学科】</p> <p>昨年度に引き続き、妊娠から分娩、産褥、新生児期までの助産展開を、1つの事例を通し講義を行い学生が一人の女性の経過をイメージできるよう工夫した。講義の前には、教員全員が助産展開の方法を共通理解できるよう話し合いを行った。また、助産展開の講義に助産学科教員全員と実習指導教員が聴講に入り、指導について確認した。学生の理解度も踏まえて実習指導に活かし、実習の場でも指導内容や方法を確認しあい、実習指導が統一できるようにした。</p> <p>今年度より新設した「母児救命」の講義と演習では、担当講師と5回の打ち合わせを行い、内容を記録し教員全員が周知した。演習は清水病院のシミュレーター機器を借り、清水病院の教育担当看護師とも打ち合わせを行い実施した。この科目を履修後の分べん介助実習Ⅱでは、学生は講義と同じような産後過多出血となる事例があり、アセスメントにショックインデックスを活用する、スタッフへのバイタルサインの報告時に呼吸数などの呼吸状態を伝えるなど、実践に活かすことができていた。</p> <p>次年度も実践に結びつけ活かせるような教育の工夫を考えたい。</p>
<p>(4) 卒業・就業・進学</p>	<p>4</p>	<p>【看護学科】</p> <p>各学年の1年後の自分を目標にして、定期的に振り返り、キャリアを考える機会を設けた。昨年から準備したキャリア教育が活かされ、不採用となっても大きな混乱はなく就職先は8月に内定し、助産学科への進学1名が決定した。</p> <p>本年度も講師として10名以上の卒業生に依頼し、1年生はキャリアデザインの講義、2年生は2月に緩和ケア経験のある卒業生から「自分らしく生きる」シェア会を開催した。ロールモデル、看護師の資格を持ったうえで自身の生き方考えるきっかけとなった。助産師を考えている学生には、3月に研究発表への参加や助産学科の学生との交流会を計画した。</p> <p>今年度は、清水病院の採用人数の変化に伴い、複数の病院に声をかけ学内での就職説明会を、2年生に2回、1年生に1回企画した。コロナ禍で看護師の退職者数が増え、働き方が多様化することも加わり、採用状況の変化が大きい。その情報をリアルタイムで得ながら、就職先が求める状況と学生の状況を合わせ、学生が進路を選択・決定していける支援の必要性が高まっている。清水病院1年目看護師との交流会は各学年1回継続して実施した。次年度は、視野を広げてさまざまな場で活躍する卒業生を招く方法を検討していく。</p> <p>社会人基礎力を身につける課題に向け、外部業者による数回の講義を実施した。社会人としてのマナーなどを教授するが、日常生活に取り入れることは難しく特に挨拶は学生同士も病院職員にも適切にできないとの指摘があった。必要は理解しているが、相手との距離やどちらが先にするかなど思いめぐらせている間にすれ違ってしまいうという学生が多い。接遇マナーは授業等でもさらに取り入れ卒業までに身につけたい。</p> <p>卒後1年目の12月に学校での学びや培った力が就職後役立てているか電子アンケートを行った。回収率が上がるよう、11月の清水病院1年目の看護師が来校するときに直接依頼したが、回収率は35.3%であった。80%が患者との関係構築にコミュニケーション力は活かされたと回答しており最も高かった。新教育課程で</p>

		<p>強化したいと考えている臨床判断、倫理的な判断に基づく行動、他者と連携、看護を探究することについては、その必要性を再認識した。清水病院に就職した卒業生は、実習などで関わる機会がある。コロナ禍で卒業後学校を訪れる機会の減少も加わり、他の動向の把握は難しくなっている。</p> <p>今年度は5名の原級留置、2名の退学者があった。退学理由は進路変更である。入学直後に変更を考えざるを得ない状況を作らないように高校訪問や進路説明会などを通じて十分考えて受験するよう伝える必要がある。原級留置が多く出たことは、コロナ禍で医療者としてどうあるべきかを深く考える機会となった。</p> <p>【助産学科】</p> <p>学生が国家試験の問題に慣れるよう、模擬試験の年間計画を今年度は1回増やして5回/年とし、7月の実習開始までに助産師国家試験の過去問題集や参考書等の購入をした。</p> <p>早まる就職試験に対応するため、入学の書類に就職先の希望調査用紙を入れ、早期からの支援につなげた。また、昨年度の就職試験の内容や今年度の募集案内を1冊にまとめ、学生に情報提供を行い就職活動を支援した。学生は7月末までに7名全員の就職先が決定した。</p> <p>4月に卒業生との交流会を実施し、25%の学生から国家試験対策がイメージできたという回答を得た。早期の動機付けとなるよう開催前の学生への説明も検討していきたい。6月に1名の退学者があった。退学に至った要因を会議で検討した。また、助産師という職業のイメージを描き、覚悟をもって選択していけるように、学外の看護学生には学校説明会、学内の看護学生には研究発表などの両科の関りの中で、助産学科の教育を知ってもらう機会とした。</p>
(5) 学生支援	4	<p>【看護学科】</p> <p>新カリキュラムの形態機能学、臨床判断の科目は、学習会をもって全員で試行錯誤しながら進めている。1年生（新カリキュラム）と、2年生（現カリキュラム）に同じ質問をすると、明らかに思考の幅が広がっており、新しい願いに向けて方向転換が行われていることを実感している。そこで生じる思考の差を埋める工夫が必要である。「暮らし」の行動と形態機能学、臨床判断とを繋ぐよう授業を計画した。形態機能学と看護の方法が学生の頭の中でつながらないと学習が浅くなってしまうこともわかり、今後の課題となった。今年度入学生から電子テキストを導入したことは、多数の教科書を横断した検索が可能になり学生は積極的に活用している。</p> <p>国家試験の出題基準が変更となり、変更点を意識した対策を行った。3年生の国家試験対策は学生主体でお互いに助け合いながら行っており、必要に応じて教員がかかわった。低学年も国家試験に対する意識は高いが、学習方法がわからないとの声が多く、定期的に模擬問題をもとに学習方法の習得を行ってきた。</p> <p>物価も高騰し、学生には経済的に負担が大きくなる。コロナ禍でアルバイトは現在原則禁止とし、面接を行い状況に合わせて許可をしている。そのため、授業料減免制度や奨学金など情報発信してきた。日本学生支援機構から物価高に対する経済対策支援基金が受けられるよう申請し、認められ、対応している。</p> <p>【助産学科】</p> <p>ディプロマポリシーと到達目標を講義要綱に記載するとともに、初回の講義で説明し、学生への意識づけを行った。4月に卒業生との交流会を行い、62.5%の学生が実習内容がイメージできた、50%の学生が今後の授業内容がイメージでき</p>

		<p>たと回答しており、学校生活について考える機会となったと考える。</p> <p>7月の実習開始までに多くの講義と演習を行う中で、学生自身の負担や家庭の支援状況などで悩む学生もいた。学生と個別に話をする機会をつくり、教師間で情報共有しながら各学生に対して支援を行った。講義では、演習を行う講師に講義を依頼し、学生の学びが繋がるように次年度の調整を行った。実習では助産所実習を1箇所から2箇所に変更した。助産所で多様な支援の方法を学び、次の分娩介助実習Ⅱで退院後の地域での支援に結びつけることができていた。分べん介助実習の配置が一人となる学生に対し他の実習施設と調整を図り、他の実習施設の学生が行う分娩介助の見学や合同カンファレンスを行い、学生同士の学びが共有できるよう工夫した。コロナ禍であり、分娩件数の減少や実習が中止になった施設もあったが、学生は分娩介助10例に向けて努力した。</p> <p>次年度も、学生の学びの環境を整え、学生の学びたい意欲を尊重していく。</p>
<p>(6) 教育環境</p>	<p>3</p>	<p>今年度新カリキュラムと共に導入した1年生の電子テキストやグーグルエデュケーションの活用はこの1年を通して問題なく行うことができた。グーグルクラスルームを活用することで授業資料をタイムリーに配信できている。また、コロナ禍3年目となり、在宅で授業を聴講することも常態化した。ZOOMを使用している設定トラブルも少なくなり、初めはマニュアルも検討したが、その必要性もなくなった。機材に関しては、人為的な問題より、電子機材の経年劣化によるマシントラブルが多くなると思われるため、定期的な動作確認やメンテナンスを行っていく必要がある。</p> <p>昨年度より、コロナ禍の学内実習に備え講演会費で医学映像の配信を整えたため、学生が映像を自由に視聴できる教材を使用することができた。実際に実習が学内となった時には実習グループの全事例を活用することができた。また、助産学科の実習で使用使用するファントムを追加購入したことで、実習施設間での貸し借りをする必要がなくなり実習に十分活用ができています。更に教育の向上を図る為、教育の場・教材などは清水病院と連携し、教材など活用できる調整をはかっていく。</p> <p>学生の学習環境の財源も限られている中、暑さ寒さ対策を学生個々のレベルでも工夫してもらおうよう協力を呼びかけた。学校側は教室でエアコンの効きが少しでもよくなるよう、大型扇風機を購入し使用を試みた。しかし学生の積極的な活用は少なく、風の音が騒音になり教室では適さないことがわかり、実習室などの広い場所で活用している。電気消費が跳ね上がり、夏は消費電力のアラームが鳴るたびに、基本料金の値上げとならないようエアコンを止めて対応しなければならない状況だった。夏期冬季とも空調の温度測定管理を行い、節電を意識しながらエアコンの管理をしている。エアコンの老朽化により度重なる故障があり、修繕をその都度行ったが、間に合わないときは、教室の移動など臨機応変に対応し、学習環境を確保した。各教室外づけエアコンの設置が可能か業者と検討した結果、学校のつくり上多くの予算が必要となる。令和4年度に空調設備の一部交換修繕の予算要求をし、令和5年度に大規模に修繕を行える予定である。</p> <p>教職員の職場環境改善として看護・助産両学科がコミュニケーションを図りやすくし、職員間の風通しを良くしたいと考えている。物理的な制限下でコストを押さえて実現できるように不要物の片付け・棚の整理を行った。</p> <p>防火設備は修繕されている。防災訓練の実施、マニュアル作成等、体制は整備されている。しかし、学生は、防災訓練等の目的・意味、避難所の種類・経路が曖昧であり、学生の意識・認識が不足していることが明らかになった。避難訓練のみで</p>

		<p>なく、知識を与え、意識の改善をしていけるような防災訓練を検討していきたい。台風による影響として、学校内が断水となり、学生の安全確認と授業方法の変更、物資ステーションの設置など対応した。近隣の市民や他市の看護学校から水の支援を受け、学内では学生間の協力も生まれ、その体験を災害看護の授業で活かす機会とした。防災について考える出来事が増えているので、その機会を逃さないようにしていく。</p>
<p>(7) 学生募集</p>	<p>4</p>	<p>【看護学科】</p> <p>7月末までに会場形式進路相談会7回、高校での進路説明会10校、高校訪問33校（静岡市内22校・中部地区11校）を実施した。コロナ禍で昨年度まで中止していた静岡県看護協会主催などの開催を含め、可能な限り参加した。推薦入学試験後に、高校訪問10校、さらに会場形式進路相談会2回、高校での進路説明会5校を実施した。また、本校での学校説明会を年間3回、7月は会場形式、8月・3月はオンラインとした。7月に80名、8月に32名の参加があり、オンライン開催時は市外在住の高校1・2年生の参加が多い特徴があった。参加者からは、学校の雰囲気を直接感じることができた、学生の様子から学校生活が伝わり受験の意思が強まったなど、好評であった。コロナ禍であり、来校者と当日の協力者も制限したが、事前に学生主体で学校案内動画を作成するなど、在校生、卒業生と協力して学校の魅力を発信できた。職員全員から意見を募り、ひとつのキャッチフレーズを決め、学校のPRに活用した。しみかんのワードをなぞり『しぜんあふれる環境で、みんなで学ぼう、かんごしへの第一歩』と決定した。学生がデザイン化したものが完成したため、今後は、視覚的にも学校宣伝に活用し、学校の知名度をあげていきたい。</p> <p>今年度は、一般受験の応募人数が減少した。少子化と大学志向の高まりの中、中部地区の看護専門学校との受験日の重なりが要因のひとつであると予測される。学生確保に向けて、入学試験の方法を見直すとともに、中部地区の学校との情報交換を行っていく。また、学生の母校訪問や、学生自治会によるインスタグラムを活用した魅力発信などを検討し、今後も学生との協力の下で学校の宣伝をしていきたい。令和5年度は、新年度を迎えてはじめての高校訪問時に、新しい募集要項を持参して学校の魅力発信をしたい。募集要項制作を例年より早めに着手する予定で、現在、計画段階にある。新教育課程での取り組みや看護学科と助産学科の2学科があるよさをアピールし、高校訪問の範囲を拡大していく。</p> <p>【助産学科】</p> <p>7月23日の土曜日に実施した学校説明会では、32名の参加があった。コロナ感染予防策として、昨年度同様人数制限を設け来校型で実施した。アンケート結果は、「本校の特徴・教育課程」に興味を持った参加者は100%、100%の参加者が「とても満足」「満足」という結果であった。</p> <p>また、学校説明会に参加する機会を増やし多くの方に参加してもらうため、平日にも学校説明会を開催し5日間の開催で9名の参加があった。アンケートの結果では、5名の参加者から「実際の演習や講義を見学することにより、学校生活を知ることができてよかった」との意見があった。参加者アンケートの結果を踏まえ、卒業生には実習について、在校生には入学までの心得についてビデオメッセージをお願いしたいと考えている。学校説明会の参加者アンケートに「説明会を知った方法」について学校のホームページが97%だった結果を踏まえ、ホームページを充実させていきたい。次年度は、学校説明会の日程を早めにホームペー</p>

		<p>ジにあげて周知を図っていく。学校説明会に参加できない方に対しては、QRコードから演習の様子などを紹介できるよう動画配信を検討していく。</p> <p>助産学科の周知と学生確保に向け、募集要項を実習施設や近隣の学校を中心に配布し、ホームページ上で助産学科だよりを適宜更新した。卒業生（1・2期生）の出身看護学校へ教務長が学校訪問を行った。卒業生の在校時の様子や近況を伝え、助産学科受験希望者の状況を知り、助産学科のアドミッションポリシーを伝えることができた。また副校長が高校へ学校説明会に行く際、学校案内を持参し、高校生年代への周知を図った。</p>
(8) 財務	4	<p>予算運用においては、施設管理の状況を見ながら執行し、学校運営に関して教員と事務員が連携・協議し、順調に実施することができた。値上がりした電気料の対応については、11月の補正予算で190万円の追加予算を確保し、対応した。</p> <p>次年度以降は、各種備品（教材類（実習人形等）・ベッド類・机類・その他）の更新を計画的に実施する。また防火シャッターの整備など長期的視点で予算を確保し、安全に適切に学校運営や災害など非常時の対応ができるように整えたい。また、施設の改修についても順次行えるよう財政に要求していきたい。</p>
(9) 法令等の 遵守	4	<p>【看護学科】</p> <p>運営に関する指導ガイドラインに沿って実習施設における同時に行う実習人数の増加に伴い実習施設の開拓を行った。そのことによる養成所の指定規則第7条に基づき実習施設の変更承認申請を行い看護学校の運営規則の遵守に努めた。情報セキュリティの研修は全員が実施している。</p> <p>【助産学科】</p> <p>新型コロナウイルス感染症対策として分検介助実習が中止となった実習施設があり、学内演習を行って規定の教育課程を履修できるように支援した。また、妊娠期から継続して受けもたせていただく妊婦の妊婦健康診査にも立ち会えない実習施設もあったが、インターネットを用いたりリモートでの妊娠中の指導を実施し、妊婦と学生が関わられるよう工夫した。</p> <p>9月の台風による浸水被害では、リモート授業や講師に講義場所を提供していただくなど授業に影響のないよう調整した。</p> <p>新たな実習施設を開拓し、実習施設変更承認申請を提出し承認を得て令和5年度より分べん介助実習を行う。次年度も、規定通り教育課程が実施できるよう工夫し実習施設と協力していく。</p>
(10) 社会貢献 ・地域貢 献	4	<p>昨年に続き救急フェア・静岡マラソンは開催が見送られ、それに伴いボランティア募集はなかったが、新たに3/31・4/1に開催される静岡まつりのボランティア協力依頼が届いている。各学年の教室に案内を掲示、学生へ声を掛け募集を募っている。授業の中で福祉ボランティア、災害ボランティアを募集したが、学生からの反応がなく、コロナ禍における学生の閉塞感・意識の変容を感じている。公でのボランティアこそないが、9月の豪雨災害時には被災した知人・親族の助けに応じ片付けを手伝った者や、水や風呂を提供した学生もおり、個人での活動は行っていた。反対に、支援を受ける側の身となった学生はそのありがたみを実感していた。双方の体験から、ボランティア精神が芽生えることを期待したい。</p> <p>2月から3月のボランティアに看護学科1年生1名・2年生19名・3年生1名・助産学科1名が参加予定であり、手をあげた1年生も多く施設と調整予定である。ボランティア活動について発信・共有する機会も模索したい。</p>

<p>(11) 国際交流</p>	<p>4</p>	<p>看護学科では、3年生が国際情報論の授業を通して諸外国の文化的、社会的特徴を学んでいる。1年次老年看護学概論において、1/19に静岡医療福祉専門学校と専門職連携の授業を実施した。事前打ち合わせより、当該校の介護福祉科2年にインドネシア、中国の学生が2名在籍していることがわかった。コロナ禍にあり1年次には外国籍の学生はおらず今年度の交流は難しいため、コロナの終息と今後の交流発展に期待したい。</p> <p>A病院における助産学科の実習では、関わった妊産婦の3割程度が外国籍であった。分娩の介助だけでなく、母乳や沐浴の是非など、対象に合わせた文化的背景も考慮し関わる重要性を学んだ。</p> <p>本校の一般入試に先立ち、中国の方から問い合わせがあり、マニュアルに則り柔軟に対応した。日本の大学を卒業し国内に住んでおり、何度かやりとりを重ねたが、受験には至らなかった。今回の経験をもとに今後適切に対応する。</p>
<p>(12) 教育力の 向上</p>	<p>4</p>	<p>年間を通して、専門分野への学会参加や学習会と授業研究を行い、より良い教育活動となる機会を確保できた。電子テキストは、学生・教員共に大きなトラブルなく使用の継続ができています。担当科目によって使用状況に差があるのが現状であり、教員間で情報共有することで、今後もスキルアップを図っていく必要がある。</p> <p>看護学科で今年度から開始となった地域・在宅看護論実習に向けて、担当者から臨床研修への声掛けが行われていた。しかし、他の業務との兼ね合いや、実習内容自体の共有不足もあり全員の教員が臨床研修に対して主体的に行動するには至らず、今後の課題として取り組んで行く必要がある。</p> <p>年間計画された臨床指導者会議では、コロナ感染症の影響で、中止や会議形態の変更などが生じた場合も、参加人数を限定し伝達方法を変更するなど臨床指導者と教員間での情報伝達や協力体制を整えることができた。</p> <p>各学科の学習会は、おおよそ計画通りの実施ができています。看護学科では、今年度より新カリキュラムで開始された形態機能学について・形態機能学と看護の方法への学びの継続について、などの意見共有や意見交換を通して、より良い授業になるように取り組んでいる。また、年間後半の学習会では、来年度の実習に向けての意識共有や、授業科目との関連などを学び合うことで、教育力の向上につながっていると云える。助産学科では、教務会議の中で実習における学生との関わり方や、今年度の授業や実習評価を踏まえ教育方法について検討した。</p> <p>各自の専門分野に関する学会に参加する年間計画があり、計画通りに参加することができた。コロナ禍であり、学会がリモートやオンデマンドになっているものも多々あり、開催地が遠い場合でも参加できる点は、今後も活用していける点である。また、看護学科では今年度より「専門職連携教育（IPE）」がスタートした。介護福祉士との共同学習に向けて、IPE相手校と連絡・調整や情報交換をし、互いに協働してチームとして各々の立場を活かした連携のための教育について教員間で情報を交換する機会となった。</p> <p>年度の前半は、学習会に関連して授業研究が複数回実施できていた。後半は、新カリキュラムで開講となる看護過程演習などに向けて、授業構成の相談や使用する用紙について改善点の集約など、より良い教育活動となる連携が取れている。</p>

6 次年度の自己点検・自己評価委員会の活動

- 1) 求める学生の確保に向けて2学科あるよさを活かした本校の魅力の情報発信に取り組む。
- 2) 多様な価値観をもつ学生の社会性および職業としての倫理を育む。
- 3) 学習環境の整備に取り組む。